

カルメン

芥川龍之介

青空文庫

革命前^{ぜん}だったか、革命後だったか、——いや、あれは革命前ではない。なぜまた革命前ではないかと言え、僕は当時小耳^{こみみ}に挟^{はさ}んだダンチエンコの洒落^{しやれ}を覚えているからである。ある蒸し暑い雨^{あま}もよいの夜^よ、舞台監督のT君は、帝劇^{ていげき}の露^{バルコニー}台^{たたず}に佇^{たたず}みながら、炭^{たんさ}酸^{んすい}水のコップを片手に詩人のダンチエンコと話していた。あの亜麻色^{あまいろ}の髪^{かみ}の毛^{もう}をした盲^{もく}目^{もく}詩人のダンチエンコとである。

「これもやっぱり時勢ですね。はるばる露西亜^{ロシア}のグランド・オペラが日本の東京へやって来ると言うのは。」

「それはボルシェヴィツキはカゲキ派ですから。」

この問答のあつたのは確か初日から五日目^{いつか}の晩、——カルメンが舞台へ登った晩である。僕はカルメンに扮^{ふん}するはずのイイナ・ブルスカアヤに夢中になっていた。イイナは目の大きい、小鼻の張った、肉感の強い女である。僕は勿論カルメンに扮^{ふん}するイイナを観^みることを楽しみにしていた、が、第一幕が上つたのを見ると、カルメンに扮したのはイイナではない。水色の目をした、鼻の高い、何^{なん}とか云う貧^{ひん}相^{そう}な女優である。僕はT君と同じボツクスにタキシイドの胸を並べながら、落胆^{らくたん}しない訣^{わけ}には行かなかった。

「カルメンは僕等のイイナじゃないね。」

「イイナは今夜は休みだそうさ。その原因がまた頗るロマンティックでね。――」

「どうしたんだ？」

「何とか云う旧帝国の侯爵こうしやくが一人、イイナのあとを追っかけて来てね、おととい東京へ着いたんだそうさ。ところがイイナはいつのまにか亜米利加人の商人の世話になっている。そいつを見た侯爵は絶望したんだね、ゆうべホテルの自分の部屋で首を縊くって死にしまったんだそうさ。」

僕はこの話を聞いているうちに、ある場じようけい景を思い出した。それは夜の更ふけたホテルの一室に大勢おおぜいの男女なんによに囲かこまれたまま、ランプを弄もてあそんでいるイイナである。黒と赤との着物を着たイイナはジブシイ占うらないをしていると見え、T君にほほ笑えみかけながら、「今度はあなたの運うんを見て上げましょう」と言った。（あるいは言ったのだと云うことである。ダア以外の露西亞語ロシヤを知らない僕は勿論十二箇国の言葉に通じたT君に翻訳して貰うほかはない。）それからランプをまくって見た後のち、「あなたはあの人よりも幸福ですよ。あなたの愛する人と結婚出来ます」と言った。あの人と云うのはイイナの側に誰かと話していた露西亞人ロシヤである。僕は不幸にも「あの人」の顔だの服装だのを覚えていない。わずか

に僕が覚えているのは胸に挿^さしていた石竹^{せきちく}だけである。イイナのアを失ったために首を縊^くつて死んだと云うのはあの晩の「あの人」ではなかったであろうか？……

「それじゃ今夜は出ないはずだ。」

「好^いい加減に外へ出て一杯^{いっぱい}やるか？」

T君も勿論イイナ党である。

「まあ、もう一幕見て行こうじゃないか？」

僕等がダンチエンコと話したりしたのは恐らくはこの幕^{まく}合^あいだったのであろう。

次の幕も僕等には退屈^{たいくつ}だった。しかし僕等が席についてまだ五分とたたないうちに外国人が五六人ちように僕等の正面に当る向う側のボックスへはいって来た。しかも彼等のまっ先に立ったのは紛^{まぎ}れもないイイナ・ブルスカアである。イイナはボックスの一番前に坐^くり、孔雀^{くじやく}の羽根の扇を使いながら、悠々と舞台を眺め出した。のみならず同伴の外国人の男女^{なんによ}と（その中には必ず彼女の檀^{だん}那^なの亜米利加人も交^{まじ}っていたのであろう。）愉快そうに笑ったり話したりし出した。

「イイナだね。」

「うん、イイナだ。」

僕等はどうとう最後の幕まで、——カルメンの死骸しがいを擁ようしたホセが、「カルメン！ カルメン！」と慟哭どうくするまで僕等のボックスを離れなかった。それは勿論舞台よりもイイナ・ブルスカアヤを見ていたためである。この男を殺したことを何とも思っていないらしい露西亞のカルメンを見ていたためである。

×

×

×

それから二三日たったある晩、僕はあるレストランの隅にT君とテエブルを囲んでいた。君はイイナがあ晩以来、確か左の薬指くすりゆびに繃帶ほうたいしていたのに気がついていてかい？

「そう云えば繃帶していたようだね。」

「イイナはあの晩ホテルへ帰ると、……」

「駄目だめだよ、君、それを飲んじや。」

僕はT君に注意した。薄い光のさしたグラスの中にはまだ小さい黄金虫こがねむしが一匹、仰向あおむけになつてもがいていた。T君は白葡萄酒しろぶどうしゅを床ゆかへこぼし、妙な顔をしてつけ加えた。

「皿を壁へ叩きつけてね、そのまた欠片^{かけら}をカスタネットの代りにしてね、指から血の出るのもかまわずにね、……」

「カルメンのように踊ったのかい？」

そこへ僕等の興奮とは全然つり合わない顔をした、頭の白い給仕が一人、静に鮭^{さけ}の皿を運んで来た。……

（大正十五年四月十日）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utyama

校正：田尻幹二

1999年1月27日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

カルメン

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>